

永正二四年（一五二七）一〇月、真里谷信勝は軍勢を動員した。

これには里見氏から与力が差し向けられ、六〇〇〇もの軍勢は小弓城へと進発していった。原入道善覚は主家である千葉介勝胤へ援軍を要請した。しかし、かつての不信感が手伝い「これまでも単独で真里谷を撃退しているではないか。今更援軍の必要などあるか」と、勝胤はこれに応じる素振りを遂に見せなかった。

籠城策を取っていた原入道善覚は、このときひたすら援軍を信じていた。攻めかけてくる真里谷勢はいつものように、適当な攻めをしてくるくらいにしか認識していない。まさかその本陣に足利義明がいて、しかも小弓を落として御所にしようと企んでいようとは、考えもしなかったのである。

物見の兵から

「古河公方の御舎弟が真里谷本陣に」という報せを聞き、敵は本気で小弓城を陥落させるつもりであると、原入道善覚ははじめて危機感を覚えた。再び千葉家へ使いが出されたが、援軍の決定が為されても、その動きは緩慢であった。原氏の勢力を削ごうという意図が、千葉家中に広まっていたためである。

古河公方・足利高基を支持する以上、その御舎弟であっても、これを討つことはやぶさかでない。

そう触れ回ったものの、やはり小弓城の士気は盛り上がり欠けていた。足利の血縁に弓を向けることは、畏れ多いことなのである。

「これでは示しがつきませぬ。血族が率先して見せねば兵は従う試しはござりませぬ。ここは城主たる某が討つて出るしか士気を高める術はござらぬ」

原入道善覚の子で小弓城主・原孫次郎基胤が進み出た。

「いや、城主が討つて出るときは、城落ちるときと心得るべし」

「士気のない城は落ちたも同然。これを回復す

るために討つて出るので。それに武運つたなく討ち死にしても、あとには父上が控えておられる。安心して出陣が適います」

原孫次郎基胤の申しようは道理だ。しかし原入道善覚は、なぜか不安を隠せなかった。小弓城から討つて出た原孫次郎基胤の姿は、たしかに城内の士気高揚につながった。例え相手が古河公方御舎弟だとしても、城を守るためならば弓矢にかけて対峙しても仕方のないことだった。

「殿に遅れることなかれ」

家老の高城越前守胤広がそれに追従した。やや遅れて、高城下野守胤正が追った。

真里谷信勝は冷静に見定め

「退路を断て」

と采配した。繰り出してくる軍勢をみた高城胤正は

「退路が断たれては逃げ場を失います。はや撤退を」

と叫んだが、原孫次郎基胤は逍遙と

「敵陣を突破すればよいこと。安泰な戦場などどこにもない。我らが過酷を負ってみせれば兵はそれについてくる」

と呟いた。

しかし、すっかり怯えた高城胤正は、あろうことか、勝手に退き陣を開始してしまったのである。これにより原孫次郎基胤の背後が丸裸となった。

真里谷信勝がこれを見逃すはずがない。

「あの馬印は城主・孫次郎とみた。それ、討ち取れ」

総崩れのなか、高城越前守父子が立ちほだかり

「殿、ひとまず城へ。このままでは無駄死にござります」

と叫んだ。

この戦いで高城越前守胤広・左五右衛門父子は討ち死にした。原孫次郎基胤は退路を断たれ、よもや逃げ場もない。

「よもやこれまで、一人でも多く道連れを」

と、原孫次郎基胤は鎗を大振りしながら敵陣に飛び込んだ。そしてそのまま討ち死にしたのである。その様子を城内からみていた原入道善寛は愕然となった。

「ええい、下野（高城胤正）の奴め。あれが退かねば孫次郎は……奴はどこじゃ！」

「下野殿、蓄電！」

「なんだと？」

原入道善寛は地団駄踏んで悔しがった。これでは戦さにならない。援軍さえ来る気配もない。

（こんなことが……）

激しい憤りに、原入道善寛は身震いするしかなかった。

原入道善寛は諸将を本丸に招集して、こののちをどうすべきか論じた。この一戦の後見は原入道善寛であったが、総大将は討ち死にした基胤と原式部少輔胤清である。原入道善寛は胤清に意向を訊ねた。

「ここに至っては立て直しを図ることが良策、城はいつでも取り戻せますが、人臣の命は取り戻せませんんだ」

そう呻く胤清の言葉は正論だ。

「口惜しい限りよな。五月には孫九郎が、そして今し方に孫次郎が討たれた。総大将のひとり行朝入道は一族揃って蓄電。このうえ城まで落とすことになろうとは……」

原入道善寛はそれきり口を噤んだ。この先の戦局を見据えれば、原胤清の申し分は正しい。

「入道殿、されば夜陰を待つて」

胤清の言葉に、入道善寛は黙って頷いた。

「千葉家よりの援軍の報せは？」

その問いに希望的な応えはない。これで進退は決した。

十十十

小弓の嵐（4）

夢酔 藤山